

【文学部】中期計画総括シート

提出日:2022年1月7日

責任者	文学部長	担当部局	文学部
-----	------	------	-----

1. 文学部の理念、目的、各種方針

文学部の理念	変更の有無
文学部が教育研究活動の中心に据える理念は次の二点に集約される。 1. スクールモットーである“Mastery for Service”に則ったキリスト教主義教育 2. 人間存在とその営みや文化を探求する人文学の修得による全人的陶冶	有・
文学部の目的	変更の有無
人間存在とその営みを、さまざまな方向からの検討を通じて明らかにする専門的能力を涵養するとともに、キリスト教主義教育を通して豊かな人間性を育み、現代社会を理解するための幅広い視点と教養の獲得を重視して教育研究を進める。それにより、包括的で幅広い教養と高度で専門的な知識を合わせ持ち、深い洞察力を身につけた人間を育成する。 以下に学科ごとの目的を掲げるとともに、さらに三学科に共通する目標を示す。 文化歴史学科 文化歴史学科は、真・善・美の理想を求めて空間と時間の中を生きる人間の基礎的構造及び歴史について、教育研究を行う。 総合心理科学科 総合心理科学科は、現代社会に生きる人間の心理的諸相について、認知・行動・発達の観点から、その病理を含めて、教育研究を行う。 文学言語学科 文学言語学科は、言葉を持ち文化を形成する人間の営みについて、文学と言語の両面から教育研究を行う。 共通の目標 1) 基礎的能力を育み幅広い教養の獲得をめざす教育研究 基礎・基本を重視した教育を通じて、主体的に課題を設定しこれを解決できる能力を養成するとともに、人文学的素養に立脚した真の知性と品格をそなえた人間の育成をめざす。 2) 学際性に富む教育研究 広範で多様な学問領域にふれることを通じて均整のとれた柔軟な思考能力を涵養するとともに、文化全体を見渡す視野と方法を身につけ創造的に考え自ら行動することのできる能力を養成する。 3) 自らが得た知の社会への発信を重視する教育研究 豊かな人間性と幅広い教養を持ち、よき住民、市民として地域社会や国家はもとより、国際社会においても重要な貢献をなし得る能力を養成する。同様に、よき社会人、職業人として各界に積極的な貢献をなし得る能力を養成する。 4) 他者との関わりを大切に自己実現の端緒を掴ませる教育研究 自分の周囲には自身とは異なる発想や考えを持った人がいることに改めて気付かせ、他者と粘り強く対話し、真の意味でのコミュニケーションを図ることを通じて己の人間の成長の端緒を掴ませていく。 5) 深い専門的知識の獲得と高度な思考能力の育成との接続をめざす教育研究 高度専門職及び研究職の養成(大学院教育)も視野に入れて、その基盤となる学問的知識及び技能を体系的に獲得させるとともに、それを基にした思考能力によって社会に寄与しうる新たな知の発見に向かう人間を育てる。	有・
学位授与方針(DP)	変更の有無
Kwansei コンピテンシーの獲得を念頭において文学部のディプロマ・ポリシー(DP)を以下のとおり定める。 文学部は、「建学の精神に則ったキリスト教主義教育」および「人文学の修得による全人的陶冶」を中心的な理念とし、広範で多様な学問領域の中での基礎・基本を重視した教育を通じて以下の能力を身につけた学生に対して学士(文学)の学位を授与する。 1. 基礎・基本を重視した教育を通じて得られる、人文学的素養に立脚した真の知性と品格をそなえ、主体的に課題を設定しこれを解決できる能力。 2. 広範で多様な学問領域に触れることで得られる文化全体を見渡す視野と方法に基づき、均整のとれた柔軟な思考能力及び、より創造的に考え自ら行動することのできる能力。 3. 豊かな人間性と幅広い教養を持ち、よき市民として地域社会や国家はもとより、国際社会においても重要な貢献をなし得る能力。同様に、よき社会人、職業人として、各界に積極的な貢献をなし得る能力。 4. 高度専門職及び研究職の基盤となる強固な学問的知識及び技能に基づき、学問的な立場から社会に貢献できる能力。 3学科それぞれの学位授与の方針は以下のとおりである。 1. 文化歴史学科 ①哲学倫理学・美学芸術学・地理学地域文化学・日本史学・アジア史学・西洋史学の基礎的知識のもとに、人間存在の思想的・芸術的・空間的・歴史的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②文化や歴史に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。 2. 総合心理科学科 ①心理科学の基礎的知識のもとに、人間存在の心理的・行動的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②心理科学の諸分野に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。 3. 文学言語学科 ①日本文学日本語学・英米文学英語学・フランス文学フランス語学・ドイツ文学ドイツ語学の基礎的知識のもとに、人間存在の文学的・言語的側面及びそれに関わる活動について主体的に課題を発見し、適切に問題を設定する能力と、幅広い観点から対象を洞察し、問題を合理的に解決する能力を身につけていること、②文学や言語学に関わる広範で多様な学問領域に触れることを通じて、広い視野と均整のとれた柔軟な思考能力を身につけていること、である。	有・
教育課程の編成・実施方針(CP)	変更の有無
4年間のカリキュラムを通じて、以下のような教育を行う。 文学部の教育理念と目的に沿って設定された様々な授業科目の中から、各学科・専修の求める専門性に従った履修体系と学生の主体的な関心に基づいて科目を履修し、必要とされる単位数を修得することが学士(文学)学位授与の要件となる。特に文学部では学修の集大成として卒業論文の作成が義務づけられている。 3学科それぞれの年次毎のカリキュラムの理念は以下の通りである。 1. 文化歴史学科 第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深める。	有・

<p>第2学年度では、学科・専修の提供する概論等の専門講義科目から将来の専門に関わる科目に重点をおいた学修を導く。さらに、資料・史料の読解・調査やテキストの解釈などを目的とする研究科目の提供を通じ、自ら読み解き理解することのできる基礎的学力を養成する。</p> <p>第3学年度では、所属する専修が提供する演習科目、研究科目、特殊講義科目、文化歴史学科他専修が提供する学科科目等を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。</p> <p>第4学年度では、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、専修諸分野のそれぞれにおいて、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p> <p>2. 総合心理科学科</p> <p>第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深める。</p> <p>第2学年度では、学科・専修の提供する専門講義科目に重点をおいた学修を導くとともに、心理科学に関する専門用語の習得や英文読解力を養う研究科目、心理科学の研究方法を身につけるための実験実習科目の提供を通じて基礎的知識や技術を養成する。</p> <p>第3学年度では、専修が提供する演習科目、研究科目、実験実習科目、専門講義科目を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。</p> <p>第4学年度では、それまでに身につけた専門知識や能力をもとに、各研究分野において学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p> <p>3. 文学言語学科</p> <p>第1学年度では、大学における学修の基礎を身につけ、学科に関連する諸領域への関心を深めるとともに関連する言語の修得につとめる。</p> <p>第2学年度では、学科・専修の提供する専門講義科目に重点をおいた学修を導くとともに、文献資料の読解や作品・テキストの解釈などを目的とする研究科目を通じて、自ら読み解き理解していくことのできる基礎的学力を養成する。</p> <p>第3学年度では、所属する専修が提供する演習科目、研究科目、専門言語科目、特殊講義科目、文学言語学科他専修が提供する学科科目等を通じて、専門的な研究能力の養成を行う。</p> <p>第4 学年度では、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、専修諸分野のそれぞれにおいて、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い卒業研究を完成させる。</p>	
<p>学生の受け入れ方針(AP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>【関西学院大学(学士課程)】</p> <p>I. 関西学院大学アドミッション・ポリシー</p> <p>世界を視野におさめ、他者(ひと)への思いやりと社会変革への気概を持ち、高い識見と倫理観を備えて自己を確立し、自らの大きな志を持って行動力を発揮する“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成することが関西学院のミッションです。</p> <p>関西学院大学は、このミッションに共感し、大学での学びや諸活動の中で、自分への挑戦をし続ける意欲にあふれ、さまざまな適性を有する多様な背景をもった学生・生徒を世界のあらゆる地域から受け入れます。</p> <p>そのために、これまでに培われた確かな基礎学力、活動や経験を通じて身に付けた資質、能力、学ぶ意欲や人間性などを、多様な入試制度により多角的に評価することを基本的な方針としています。</p> <p>II. 各学部のアドミッション・ポリシー</p> <p>文学部アドミッション・ポリシー</p> <p>文学部は、建学の精神に則ったキリスト教主義教育ならびに人文学の修得を通じて、全人的陶冶を行うことを教育理念としています。多様な領域にまたがる人文学の教育・研究のために、文学部は文化歴史学科、総合心理科学科、文学言語学科の3学科で構成され、さらに11の専修に区分されていますが、どの専修に所属しても学生それぞれの関心に従って基礎的な科目群から専門的な科目群まで幅広く履修できるよう柔軟なカリキュラムを組んでいます。また最終的な到達目標として卒業論文の作成が必修とされています。4年間の勉学を通して、主体的に学び、自ら問題を見出し追究していく姿勢が重要です。高等学校の学習においても、基本的な科目全般にわたって基礎学力を充実させるとともに、幅広く客観的な視野と、先入観や画一的なものの見方に囚われない柔軟な思考力、さらには自らが興味関心を持ったテーマに対して粘り強く取り組んでいく姿勢を培っていただくことが求められます。このような総合的な知的基盤を備え、かつ自らの見出した研究課題に積極的に取り組んでいかれる資質に富んだ者を、一般入学試験・各種入学試験それぞれの特徴を生かして、本学部の学生として受け入れることを基本方針としています。</p> <p>III. 入学試験毎のアドミッション・ポリシー</p> <p>1. 一般選抜入学試験</p> <p>一般選抜入学試験は、各学部での教育に必要な「総合的な学力を持つ受験生を選抜する」ものです。</p> <p>一般入学試験では各学部の教育理念・目標に基づき試験教科・科目、配点を設定し、筆記試験により関西学院大学で学ぶために必要な学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定するための問題を独自に作成しています。</p> <p>全学日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語」「国語」を必須とし、「日本史」「世界史」「地理」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。全学日程の国際学部については、高い英語能力を有する生徒を評価するため、「英語」に特化した「英語」「英語論述」による入学試験も実施しています。</p> <p>学部個別日程の文系入学試験では本学で学ぶために必要な「英語(記述式含む)」を必須とし、「国語(記述式含む)」「日本史」「世界史」「数学(記述式)」を選択科目とし筆記試験を実施します。なお文学部・法学部では「国語(記述式含む)」「日本史」「世界史」「数学(記述式)」に加えて「地理」を選択科目に加えています。人間福祉学部については学部個別日程において「英語」「国語」の2科目による筆記試験を行っています。教育学部については初等教育学コースの主体性評価方式の入試において、高等学校における生徒会活動、学校行事、課外活動等でのリーダーシップを、調査書と提出書類を合わせて評価する入学試験を実施します。</p> <p>理系入学試験においては全学日程を2日間実施、入試制度も2種類実施しています。総合型および数学・理科重視型においては、本学で学ぶために必要な「英語」「数学(記述式)」を必須とし、理科(記述式)「物理」「化学」「生物」のいずれかを選択する筆記試験を実施しています。</p> <p>一般入学試験関学独自方式日程は、英語・数学科型、関学英語併用型、関学数学併用型の3方式を実施しています。英語・数学科型は、関西学院大学独自の「英語(記述式含む)」と「数学(記述式)」による筆記試験を実施し、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を判定しています。関学英語併用型・関学数学併用型は、関西学院大学独自の「英語(記述式含む)」または「数学(記述式)」に、大学入学共通テストの教科・科目の得点を加味し、各学部で学ぶための学力と総合的な基礎学力を有する生徒を選抜するために実施しています。</p> <p>大学入学共通テストを利用する入学試験は、「一般入試とは異なるタイプの受験生を受け入れるための入試制度」と位置づけています。大学入学共通テストで実施している教科・科目の筆記試験をもとに、本学で学ぶために必要な総合的な基礎学力を「知識・技能」を中心に判定を行い、大学入学共通テストの得点のみで合否判定を行います。</p> <p>1月出願においては、総合政策学部3科目英数型を除く文系学部は「外国語」「国語」を必須として、「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点を採用する方式を3科目型、5科目型の方式で実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え科目数を設定し、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。</p> <p>3月出願においては、文系学部は「英語」を必須とし、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「公民」から高得点科目を採用する方式を実施しています。理系学部は「英語」「数学」を必須として各学科の学びに必要な科目について必須科目もしくは選択科目として加え、高等学校における各教科の基礎学力のうち「知識・技能」を評価します。</p> <p>また、大学入学共通テストを利用する入学試験(1月出願 英語検定試験活用型)は、「読む」「書く」「聞く」「話す」の英語の4技能を身に付けた生徒を選抜するために、提出された書類のうち英語検定試験のスコアを出願資格として高く評価し、大学入学共通テストの教科・科目の得点を活用して実施する入学試験であり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を得点として評価し、検定試験に取り組んだ「主体性」を高く評価します。</p> <p>2. グローバル入学試験</p> <p>グローバル入学試験は、入学後、本学のスーパーグローバル大学創成事業におけるインターナショナル・プログラムに積極的に取り組むことを希望する生徒や、将来、国際的な活躍を目指す生徒を対象に5つのカテゴリーで実施する入学試験です。</p> <p>①国際貢献活動を志す者のための入学試験</p> <p>国際貢献活動を志す者のための入学試験は、関西学院大学が先駆として実施している学生の国際ボランティアに参加することを志す者で、秀でた英語コミュニケーション能力を有し、国際的課題に関し興味を持ち課題解決のための提案を行い、実践しようとする意欲を持つ者を対象とした入学試験です。英語検定試験においてCEFR B2以上を有する生徒、課題研究や模擬国連等に取り組む知識・技能、思考力・判断力・表現力を有し主体性・多様性・協働性を高めた課題解決能力</p>	<p>④・無</p>

を有する生徒を対象に出願資格を設定し評価を行っています。
一次審査においてはこれらの実績や成果と、提出された志望理由書等の書類と合わせた書類審査と口頭試問・適性面接審査により評価を行います。口頭試問・適性面接審査では日本語および英語による面接により、国際的な知識や英語コミュニケーション能力、発展途上国でのプログラムに参加するために必要なチャレンジ精神、価値観や粘り強さを評価しています。
二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

②英語能力・国際交流経験を有する者を対象とした入学試験

英語能力・国際交流経験を有する者を対象とした入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において国際社会で活躍する能力を身に付けることを志し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、もしくは国際交流体験による異文化社会における経験を有する者で、国際的課題に関し興味をもち課題解決のための提案に意欲を有する者を対象とした入学試験です。

出願資格として、英語検定試験において CEFR B1 程度以上を有する生徒、海外における留学経験を有する生徒、模擬国連等に取り組み問題解決能力を育んだ生徒、英語弁論大会、英語エッセイコンテスト等において入賞した経験を持つ英語コミュニケーション能力を有する生徒を対象に設定し、調査書など提出された書類とあわせて、「主体性」を中心とした書類審査を行っています。

また、英語を題材とした論述試験、日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

③インターナショナル・バカロレア入学試験

インターナショナル・バカロレア入学試験は、関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)において、国際社会で活躍する能力を身につけることを志す者で、国際的に認められた大学入学資格であるインターナショナル・バカロレアDP(ディプロマ・プログラム)の課程を修了後、統一試験に合格し、インターナショナル・バカロレア資格を有する者を受け入れるための入学試験です。出願時においてフルディプロマを取得済みの者でスコアが 32 ポイント以上の者、もしくは取得見込で IB PREDICTED SCORE が出願時に 32 ポイント以上であるものは英語論述審査が免除となります。

また日本的一条校において上記のスコアを有する者は日本語小論文が免除となります。これに満たない者については、英語を題材とした論述試験・日本語小論文試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価する一次審査を行います。二次審査においては学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や人間性などを評価し選抜を行います。

④グローバルキャリアを志す者のための入学試験(英語エッセイ方式)

グローバルキャリアを志す者のための入学試験は関西学院大学のインターナショナル・プログラム(国際教育プログラム)もしくは総合政策学部独自のカリキュラムである(グローバルキャリア・プログラム)において、国際社会で活躍することを志し、英語コミュニケーション能力をもつ者を対象とした入学試験です。国際社会で活躍する能力を身につけることをめざし、現代社会で話題となっている様々なニュース、トピックに対して、自身の知識や考えを英語で伝えることのできる生徒を対象に実施します。

一次審査においては筆記審査を行い、現代社会で話題となっているトピック4題のうち、2題を選択し、それぞれ英語 300 語程度のエッセイを書いてもらいます。また自分の書いたエッセイに適切な英語のタイトルをつけてもらいます。トピックはいずれも英語で書かれており、それらに関する情報や資料は掲載されていません。そのトピックについての知識、考え方も評価の対象とします。新聞などで社会の動きを知っていることも問われます。二次審査においては、面接(口頭試問含む)を行い学ぶ意欲や人間性を評価し書類審査と合わせて総合的に評価し選抜を行います。

⑤グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験

グローバルサイエンティスト・エンジニア入学試験は国際的に活躍する科学者や技術者となることを志し、自然科学に関する科目について一定の学力を有し、秀でた英語コミュニケーション能力を有する者、インターナショナル・バカロレア資格を有する者、高等学校在籍時に海外において自然科学に関する教育を受けた経験を有する者もしくは自然科学分野における特記すべき国際交流経験を有する者、国際科学技術コンテストに出場した経験を有する者を出願資格として設定し、調査書等提出された書類とあわせて「主体性」を中心に書類審査を行います。

また、入学後必要な数学、理科の基礎知識を問う筆記試験を実施し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を中心に評価し、書類審査の結果と合わせた総合評価による一次審査を行います。二次審査では志望する学部の面接(口頭試問含む)により学ぶ意欲や「主体性・多様性・協働性」について評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し選抜を行います。

3. 推薦入学

推薦入学は高等学校長の責任ある推薦により本学で学ぶために必要な学力を有する生徒を受け入れるものです。審査においては調査書、自己推薦書、志望理由書、学校長推薦書等の提出書類による書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

①院内推薦入学

1) 関西学院高等部

関西学院高等部推薦入学は関西学院の一貫教育の大きな柱として位置づけられています。高等部でキリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、他の入学者に対しても良い影響を与え関西学院の学風を担うことを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) 関西学院千里国際高等部

関西学院千里国際高等部推薦入学は、千里国際高等部の特色である国際教育と、キリスト教主義教育による関西学院の建学の精神をもとに学んだ生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

②継続校推薦入学

啓明学院継続校推薦入学は、キリスト教主義教育により学んだ啓明学院高等部の生徒を受け入れることにより、大学進学後もそれぞれの学部において、正課、課外活動、学内諸活動の面で学生の核となり、関西学院大学の活性化に寄与することを期待し実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

③提携校推薦入学

関西学院大学提携校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、各校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

④系属校推薦入学

⑤協定校推薦入学

1) キリスト教学校校

関西学院大学協定校推薦入学は、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

2) グローバル校

関西学院大学協定校推薦入学は、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れるために実施しています。21 世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立つ

て国際社会に貢献できる人材として、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒を受け入れるものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

3) グローバル+キリスト教校枠

関西学院大学協定校推薦入学は、21世紀的な教育目標であるグローバルな観点に立って国際社会に貢献できる人材として、高等学校のキリスト教主義教育により学び、個性的でかつ高い資質をもつ生徒を受け入れ、関西学院の建学の精神および教育理念を理解し、高等学校独自の特色を活かした優れた教育プログラムによって学んだ生徒をも受け入れるために実施するものです。

審査では志願提出書類の書類審査と面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

⑥指定校推薦入学

指定校推薦入学は一定の学力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を有する生徒を高等学校長の責任に基づく推薦を受け、書類審査・面接(口頭試問含む)によって各学部において学ぶ意欲等を総合的に評価し受け入れるための制度です。

文学部

関西学院大学文学部において勉学することに強い意欲をもつ個性ゆたかな生徒を、推薦によって入学を許可することによって入学後の修学への準備期間を確保し、入学後に文学部においてその才能をさらに伸ばすとともに、本学部独自の学風を振興し、広く社会に寄与し得る人材を育成することを目的とします。審査では志願提出書類、面接における口頭試問を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価します。

4. SGH・SSH・探究(課題研究)評価型入学試験

1) スーパーグローバルハイスクール対象入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。

2014年度よりスタートした文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業は、急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付けることを重視し、課題研究と高大連携を二本の柱として教育プログラムの開発を目指しています。このスーパーグローバルハイスクール、SGHアソシエイト校において、課題研究を通じて能力を高めた生徒を、多面的・総合的に評価を行い、積極的に受け入れ、本学が採択されたスーパーグローバル大学事業への接続を促進するための入学試験を実施します。

一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語検定試験スコア CEFR B1 レベル以上を有する者と設定しています。

2) スーパーサイエンスハイスクール対象入学試験

関西学院は、キリスト教主義に基づく「学びと探究の共同体」として、ここに集うすべての者が生涯をかけて取り組む人生の目標を見出せるよう導き、思いやりと高潔さをもって社会を変革することにより、スクールモットー“Mastery for Service(奉仕のための練達)”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命としています。

文部科学省スーパーサイエンスハイスクール事業の趣旨は、高等学校及び中高一貫教育校における先進的な理数教育を通じ、生徒の科学知識・技能と科学的思考力・判断力を高めることにより将来の国際的な科学技術系人材の育成を図ることとなっています。スーパーサイエンスハイスクールにおいて、課題研究を通じて能力を高めた生徒を、多面的・総合的に評価を行い、積極的に受け入れ、本学が採択されたスーパーグローバル大学事業への接続を促進するための入学試験を実施します。

一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語検定試験スコア CEFR A2 レベル以上を有する者と設定しています。

3) 探究(課題研究)評価型入学試験

関西学院のスクールモットーは“Mastery for Service”。これは、第4代院長 C.J.L.ベーツ宣教師が学生たちに与えた言葉で、「奉仕のための練達」と訳されています。わかりやすく言えば、「人々に奉仕できる、社会に役立つ知識と人間性を、自らの主体性を持って磨き上げよ」ということです。関西学院大学では、その教育目的を具現化できる、意欲に満ちた受験生を求めています。

特に、本学で学ぶにふさわしい知識・技能、思考力・判断力・表現力を有しているだけでなく、横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度を身につけた学生を求めています。

一次審査においては書類審査を行います。さらに二次審査において学部毎に面接・集団討論・プレゼンテーション・口頭試問を行います。課題研究を通じて培った「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を多面的・多元的に評価を行います。高等学校までの学びを通じて培ったありのままの力を評価しますので、入学試験のために特段の準備を必要とするものではありません。

出願資格として、英語検定試験スコア CEFR A2 レベル以上を有する者と設定しています。

5. 帰国生徒入学試験

国際化時代に伴い、海外において勤務する日本人の数は多数にのぼっています。また、外国文化摂取のために長期留学する者も増加しています。この現象に伴う帰国生徒の教育問題は高い関心事となっています。しかし、海外での教育条件や生活環境などの違いによって大学に進学できる能力を有しながらも、日本の大学入試制度に対応できないために、正当に評価されていないという問題が指摘されてきました。これに対して、本学では、全国の大学に先駆けて1964年に帰国生徒の受け入れについての規程を制定し、その先進性で評価されています。

この入学試験は、帰国生徒の海外での経験を評価して受け入れるためであると同時に、多様な生徒を受け入れることによってキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待し、いわゆる「多元的入試」の一環として行っています。諸外国で勉学してきた帰国生徒が海外での貴重な経験と知識を生かし、学内での相互交流を通して学識や人間性をより一層高め、将来の日本および世界を支えていく真の国際人として成長していくことを期待しています。

筆記試験を実施する学部については、英語、日本語に関する知識・技能、思考力・判断力・表現力の評価を行い、面接試験において海外での体験において培った主体性・多様性・協働性や、本学で学ぶ意欲について評価を行います。

6. 国連難民高等弁務官駐日事務所との協定による難民を対象とする推薦入学試験

「難民を対象とする推薦入学制度」は、関西学院大学と国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所との協定に基づき実施する入学制度です。これは本学の建学の精神に基づく「人類の幸福と平和に資する世界市民の育成」を現代に即したかたちで実現するためのものです。

日本で生活する難民の方々は、厳しい環境下におかれています。特に教育面では、本人や家族の経済的事情や、母国での出身校の卒業証明が得られないなどの理由で、高等教育を受ける機会を失っている場合が少なくありません。それが就労条件の悪化、さらには、経済的事情の悪化につながっています。


こうした状況を少しでも改善することを目的とするこの推薦入学制度で入学した生徒が、高い教養と専門性を身につけ、将来、日本、母国あるいは国際社会において平和の構築や社会の発展を支える人材へと成長することが期待されています。また関西学院大学で共に学ぶ他の学生にとっても、迫害や戦争といった国際社会が抱える問題を身近に捉えるとともに、日本国内の国際化を意識する機会となります。

国連難民高等弁務官(UNHCR)駐日事務所の推薦に基づき、面接を行い本学で学ぶ意欲を中心にしながら「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」について評価を行います。

7. スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験

この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。

提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価を行います。一次合格者に対する二次審査は面接(口頭試問含む)を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。

<p>8. 外国人留学生入学試験 本学は、米国南メソジスト監督教会の宣教師、W. R. ランバスによって創設されました。開学当初から多くの外国人教員が教鞭をとっていたこともあり、外国人留学生を古くから受け入れ、日本の大学の中では国際色豊かな大学としてその学風を育んできました。 この入学試験制度は外国人留学生を対象とし、さまざまな国からの留学生を受け入れることにより、大学の国際性を一層高め、ひいてはキャンパスの活性化を図る教育的効果も期待した、いわゆる「多元的入試」の一環として実施されます。 出願時の提出書類に基づき審査を実施し、本学で学ぶにあたって必要な日本語力および、基礎学力を有しているかを審査した後、各学部が面接審査(口頭試問を含む)・筆記試験等を実施し、志願する学部で学ぶ意欲や人間性などを中心に評価し、出願時提出書類と合わせて総合的に判断し、選抜します。この選抜入学試験制度は、スポーツ活動において優れた能力と競技実績を有し、入学後は学業と課外活動を両立させる強い意欲をもつ者を積極的に受け入れ、本学における教育の活性化と課外活動の一層の振興に寄与することを目指すものです。提出された書類に基づきスポーツ実績を評価するとともに、本学で学ぶにあたっての基礎学力、知識、表現力、論理的思考力を筆記試験により評価します。一次合格者に対する二次審査は面接(口頭試問含む)を実施し志願する学部で学ぶ意欲を中心に評価を行います。</p> <p>9. 学部特色入学試験</p> <p>文学部 関西学院大学文学部は、本学のスクールモットーである“Mastery for Service(奉仕のための練達)”の精神を踏まえ、人間の本質を追究するために深い学識と広い視野を養う学びの場です。文化や歴史、心理、文学や言語の教育研究を通じて、人間存在の営みの本質や現代的・普遍的な課題を追究します。 本学部では、このような考えに基づいて、学部特色入学試験を実施します。この入学試験では、英語4技能の検定試験のスコアを用いることで一般学力試験と同等レベルの知識や技能を評価するとともに、論述・小論文形式での筆記審査、面接(口頭試問含む)を通じて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」「人間性」を多面的・多元的に評価し、本学部で学ぶにふさわしい意欲あふれる人を求めます。</p>	
<p>教員組織の編制方針</p>	<p>変更の有無</p>
<p>人事委員会の機能を重視する。また現状を再検討し、課題があればそれを解決することに努め、年齢構成と男女比のバランスがとれた自由闊達で活気ある教員組織をめざす。</p>	<p>有・</p>

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-① 「Kwansei コンピテンシー」の策定と運用			帳票の有無	不要
内容	<p>本大学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を再策定する。 また、策定された「Kwansei コンピテンシー」を基に大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」の到達状況を測定、評価する取組を推進する。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※学部における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	3学科 11 専修に分かれ、各学科および各専修が特色ある教育を行っている文学部においては、全体の整合性と個々の適合性を同時に検証していく必要があり、各学科および各専修の見解を統合していくことが求められる。				
<指標 1>	文学部のDP・CPが関西学院大学の Kwansei コンピテンシーに適合しているかどうかの検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学部のDP・CPの記そのものの検証	文学部のDP・CPが Kwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが Kwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが Kwansei コンピテンシーに合致しているかどうかの検証	
実績	2020 年 10 月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。	2021 年 10 月教授会にて検証を行った結果、適合していると判断した。			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	Kwansei コンピテンシーに合わせて文学部DP・CPの改訂を検討	前年に引き続き、Kwansei コンピテンシーに合わせて文学部DP・CPの改訂を検討	Kwansei コンピテンシーとのより高度の適合性を持つ文学部DP・CPの改訂	前年に改訂した文学部のDP・CPの検証	
実績					
<指標 2>	文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学部のDP・CPの記述そのものの検証	文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	前年に引き続き、文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかの検証	
実績	2020 年 10 月教授会にて検証を行った結果、合致していると判断した。新型コロナウイルス感染症下の特殊状況においても有効であることが確認された。	2021 年 10 月教授会にて検証を行った結果、合致していると判断した。昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症下の特殊状況においても有効であることが確認された。			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	各学科および各専修の教育内容に合わせて文学部のDP・CPの改訂を検討	前年に引き続き、各学科および各専修の教育内容に合わせて文学部のDP・CPの改訂を検討	各学科および各専修の教育内容とのより高度の適合性を持つ文学部のDP・CPの改訂	前年に改訂した文学部のDP・CPの検証	
実績					
<p>【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学部では、2021 年度、執行部会および 10 月教授会において、文学部のDP・CPが関西学院大学の Kwansei コンピテンシーに適合しているかどうかという観点、および文学部のDP・CPが各学科および各専修の教育内容に合致しているかどうかという観点から、文学部のDP・CPの記述そのものの妥当性を検証した。それぞれの記述に関しては不十分な箇所がないことを確認したほか、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染症下という特殊状況においてもなお、これらのポリシーが有効であることも立証された。今後は、ポスト/WITHコロナにむけてオンライン授業の一部取り入れが常態化すると予想されるが、これらのポリシーが妥当であるかどうかについて、慎重な検討を続けていくことが求められる。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(9)-① 入試制度改革への対応			帳票の有無	不要
内容	<p>グローバル化や情報化の進展、少子高齢社会の到来など社会の在り方が急速に変わり、予測が難しい状況の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための力が必要とされており、2015年1月に文部科学省より「高大接続改革実行プラン」が発表され、高大接続改革は、「高校教育」「大学教育」そしてそれをつなぐ「大学入学者選抜」の一体的な改革で、それぞれについて様々な施策が進んでいる。「大学入学者選抜改革」においては、これまで以上に多面的・総合的に人物を評価する入試への転換を掲げ、大学入試センター試験を廃止し、思考力・判断力・表現力を一層重視した「大学入学共通テスト」を2020年度(2021年1月実施)より導入。大学入学共通テストでは、国語と数学に記述式問題を導入すること、英語については4技能を適切に評価するため民間の資格・検定試験を活用することが決まっている。また、各大学の個別選抜では、アドミッション・ポリシーの明確化とともに、より多面的な選抜方法にすることが求められている。一方、AO入試や推薦入試では、一部で「学力不問になっている」といった批判があることから、小論文やプレゼンテーション、大学入学共通テストなどを通じて、学力を問う試験を必須化する方針も示されている。このような状況において、本学においては学長が入試委員長として全学部長が入試委員となる入試委員会が中心となり、以下のような入試制度改革を進めていく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高大接続改革で求められる入試制度改革への対応 上記の改革を進めるため、本学ではすべての入試において「学力3要素」を評価する入試へと変えていく。また、SGUでもある本学においてはすべての入試において英語の4技能を評価する入試へと変えていく。合わせて、各種入試においても、現行やや一芸入試的な色合いの濃いAO入試においては高等学校での活動をしっかりと評価する入試への変更を、そして、現行SGH・SSH指定校に限定している公募推薦入試も課題研究を実践しているすべての高等学校に拡大し、高等学校での探究活動を評価する入試へと変更させていく。 2. 現行入試制度・募集人員の再検討 上記のような国の高大接続改革が進むと、例えば、国公立大学ではAO入試の割合が増加する。また、18歳人口の減少という人口構造の変化(少子化)により、より一層前倒し(各種入試への定員のシフト)によって学生を確保する必要が生じる。今後、各種入試と一般入試の定員比率の再検討とともに、各種入試の定員の見直しを進める必要がある。 3. 主体性等を評価するための入試体制強化やアドミッションオフィサー配置 上記のとおり、今後の大学入試においては、学力3要素を評価するため、小論文やプレゼンテーション、課題研究論文、面接や調査書など高等学校への学びをひとりひとり丁寧に評価する入試が拡大してくる。それに伴って当然、これまで入試選抜を担ってこられた教員だけでは対応することが困難となる。そのため、職員からも提出書類の評価を行うアドミッションオフィサーを配置することが求められる。今後、アドミッションオフィサーへの入試評価業務の委嘱を進めていく。 				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では入試制度検討小委員会を適宜開催し、各種入試の実施方法や問題点について検討を重ねながら多様かつ適切な入試形態を採用し、一定の学力レベルを有する多才な人材を集めるよう努力している。各種入試については、入学センターが提案した各種入試統廃合(2023年度入試～)より、文学部では学部特色入試、グローバル入試(帰国生徒入試合)、探求評価型入試、スポーツ選抜入試を実施する。なお、11専修を抱える本学部では、たとえば指定校推薦入学においては対象となる高等学校に対してローテーション方式で専修枠を提供し、機会の平等を図っている。指定校推薦入学者に対しては成績調査を毎年おこない、成績不振者の出身高等学校に対しては適切な学力の者を推薦するよう警告文を送付している。その後の入学者に対する調査によって事態の改善が図られなかったことが判明した場合には、当該高等学校の推薦枠を削減する。こうした取り組みによって本学部への入学者の学力レベルを維持している。</p>				
<指標1>	入試制度検討小委員会の開催による入試制度の検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	新制度の検討	新制度の検討	新制度の検討	新制度の検討	
実績	今年度には入試制度検討小委員会を2回開催し、新たに導入された総合選抜入試の実施を含め、適切な入試を実施するよう検討を重ねた。	今年度には入試制度検討小委員会を開催し、新たに導入された学部特色入試の実施を含め、適切な入試を実施するよう検討を重ねた。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	新制度の継続に関する検討	新制度の継続に関する検討	次なる制度の検討	次なる制度の検討	
実績					
<指標2>	指定校推薦入学グループローテーションおよびその継続をめぐる検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	ローテーションに関する検討	ローテーションに関する検討	ローテーションに関する検討	ローテーションに関する検討	
実績	これまでのローテーション方式を維持しつつ、成績不振者の出身校について検討し必要に応じて新規の高等学校を指定校として差し替える措置を行った。	今年度は原則としてローテーション方式を踏襲して行ったが、これまでのローテーション方式を抜本的に見直す試みを行っている。そのため、入試形態別の過去10年程度の成績並びに推薦入試における成績不振者の出身校等について検討中である。現状の推薦依頼高等学校の改廃措置の検討を行った。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	ローテーションおよびその継続に関する検討	ローテーションおよびその継続に関する検討	ローテーションないし新方式に関する検討	ローテーションないし新方式に関する検討	
実績					

【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】

各種入試に関する全学レベルで大きな変更に伴い、前年度の2020年度にはAO入試の廃止に伴って新設された総合選抜入試が初めて実施された。しかしながら、2021年度には総合選抜入試の見直しが再度なされることとなり、文学部ではこうした全学的な変更に対応するため、総合選抜入試を取り止め、学部特色入試を行うこととなった。加えて、全学レベルで帰国生徒入試の見直しグローバル入試の中への位置づけられることとなり、現在その対応について文学部内で検討中である。

その他、各種入試での面接方法の統一、外国人留学試験をはじめとしたいくつかの入試方法の見直しなど、合理性を考慮しつつ諸制度の変更をおこなってきている。2021年度には新たな制度に則って、また外国人留学試験においては昨年度と同様にコロナウイルス対策によるZoomを利用した面接など新たな方式も導入しつつ、適切な入試の実行を念頭において、各種入試を実施した。さらに、指定校推薦入学による成績不振者の出身校に対する警告文の送付なども実施し、本学部学生の質の低下を避ける努力もおこなってきている。指定校推薦入試におけるローテーション方式を今後どのように運用していくのかについて、現在、鋭意検討中である。また、文学部では一般入試による入学者の比率が比較的高い水準にあるが、その数値を維持・向上するよう留意して各種入試を実施する必要がある。そのため、今後も、指定校推薦入試などの各種入試の運用について適宜検討していきたい。

実施計画(タイトル)	1-(12)-⑧ シラバスの実質化			帳票の有無	不要
内容	組織的な教育力を向上するため、三つのポリシーに基づく教学マネジメントを推進することが中心的な課題であり、そのための重点戦略としてシラバスの精緻化から取り組む。特に「授業目的」と「到達目標」を明確にすることで、カリキュラム全体の中での科目の位置づけや他の科目との比較が可能になり、科目間の相互関係を整理する契機となる。それによってCP やDP の適切性・妥当性といった上流に遡ることが可能となる。また、シラバスの精緻化は、授業外学修時間の増加につながる。				
学部独自の取り組み内容	文学部では、シラバスの充実を図るとともに、3学科11専修にわたるその広範で複雑なシラバスの質を担保するために、シラバス記述内容のモデルの作成を検討している。				
<指標1>	シラバス記述内容のモデルの作成				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	英文記述項目に関する記述内容のモデルの作成	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	
実績	必ずしも英語を得意としない教員に便宜を図るために2019年度に暫定的に作成した文学部独自のシラバス英文記述の文例を見直し、シラバス英文記述項目のモデル文として授業担当者に配布した。	前年作成の英文記述項目について再改訂の必要性を検討した上でモデル文として授業担当者に配布した。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの適切性の検証およびその改訂	前年に作成した英文記述項目に関する記述内容のモデルの完成	前年に完成させた英文記述項目に関する記述内容のモデルの検証	
実績					
<指標2>	シラバス記述内容の充実化				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	英文記述項目以外の記述内容の検証	英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	
実績	今年度シラバスに関しては、学期を通じて授業の実態に合わせて記述を改訂するよう授業担当者に指示した。次年度シラバスに関しては、授業形態やフィードバック方法につき記述を追加するよう授業担当者に指示した。	コロナの感染状況の変化により開講形態が変更される可能性を教員に伝え、それに向けてシラバスに記載すべき内容を具体的に伝達した。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	前年に引き続き、英文記述項目以外の記述内容の充実化の検討	英文記述項目以外の記述内容の充実化の完成	前年に完成させた英文記述項目以外の記述内容の充実化の検証	
実績					

【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】

文学部では今年度も2019年度に独自でシラバスの英文記述項目につき参考となる文例を暫定的に作成していたが、それを見直して文学部のシラバス英文記述項目モデル文として授業担当者に配布している。また、新型コロナウイルス感染症の状況の変化による活動制限レベルの変更に伴うシラバスの変更や追記など、授業担当者に随時依頼を行った。次年度のシラバス作成に向けては、対面授業の定義やオンライン授業に関すること、コロナ状況に応じてシラバスの変更を想定した教務機構の方針に沿いつつ、文学部に適応した補足説明文書を作成し、授業担当者、学生ができるだけ混乱しないよう対策を講じた。

実施計画(タイトル)	1-(13)-② 教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組み確立			帳票の有無	不要
内容	<p>教職協働によるアカデミックアドバイスの仕組みを確立し、学生の学びをサポートし、残留生、退学者をださないキャンパスを目指す。アカデミックアドバイス制度は実施から4年がたち、現在行われている対象学生の見直しなどの検討も必要となっている。</p> <p>— 以下、SGU時の文章 —</p> <p>本学では、従来から成績不振者へのサポートを目的とした様々な指導を学部ごとに実施してきたが、GPAのさらなる活用と学生に対してより適切かつ高度な学修支援を行うという観点から、2015年度より「アカデミックアドバイザー制度」を全学的な仕組みとして導入する。</p> <p>アカデミックアドバイザーは、学部ごとに人数を定め、学部所属の専任教員から選出するものとする。各学部は修得単位数、GPA、出席状況のいずれか、もしくは複数を用いて指導対象となる学生の基準を定める。指導対象学生に対しては、アカデミックアドバイザーが個別面談および学修指導等の修学上の支援を行う。</p> <p>制度導入後は、教育力向上(ファカルティ・ディベロップメント)部会において本制度の運用状況に関する情報共有を行い、より一層の改善等に取り組む予定である。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では、全学的なアカデミック・アドバイザー制度導入以前から、学習困難者への指導・支援を行ってきており、その実績に基づいたきめ細やかな指導を行っている。今後はその質をより高める努力を行う。</p>				
<指標 1>	アカデミック・アドバイス実施の徹底				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	アカデミック・アドバイス対象者の本制度活用について検証	アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により対面面談が困難なため実施しなかったが、特にオンライン授業への対応が遅れて授業への出席・参加率が悪い学生には個別に相談に乗り授業からの脱落を防ぐ努力をした。	新型コロナウイルス感染症の対策として、呼び出した学生の希望に応じて対面とオンラインで面談を実施した。オンライン授業に慣れられず成績不振となった学生には個別に相談に乗り、課題管理の方法など助言した。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検討	アカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の確立	前年に確立したアカデミック・アドバイス対象者への適切な連絡・指導方法の検証	
実績					
<指標 2>	アカデミック・アドバイス実績の蓄積とその活用				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	アカデミック・アドバイス制度スタート以降の実績を検証	アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	
実績	面談者数は2017年以降、毎年対象者75名に対し30件前後で推移。面談者の成績上昇率平均71%。面談効果はでている。	今年度は、春・秋学期2回実施し、合計対象者119名のうち面談者数は86名となった。春学期面談者の成績上昇率は約63%であったが、面談率が約72%に上昇しており、面談のニーズは高い。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	前年に引き続き、アカデミック・アドバイス実績の活用方法について検討	アカデミック・アドバイス実績の活用方法の確立	前年に確立されたアカデミック・アドバイス実績の活用方法について検証	
実績					
<p>【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>2021年度は、新型コロナウイルス感染症の感染状況が改善したため、学生の希望に応じてオンラインと対面の両方で個別面談を行った。今年度は、対面授業とオンライン授業が混在しているため、特にオンライン授業になじめず課題管理や心身の健康に問題を抱えている学生に個別に対応することが求められた。また、オンライン授業では授業への学生の参加意識も低くなり、これにより出席率が低下するため、授業担当教員とのコミュニケーションのとり方についても、学生各自に必要な助言を与えることに労力を割いた。</p>					

実施計画(タイトル)	1-(13)-③ TA・LA・SAの活用推進			帳票の有無	要
内容	<p>LAの配置により、授業での教育支援(教員への支援を含む)、授業外での学修支援を強化する。初年次教育である導入科目等を対象としたLAIについては制度開始から7年がたち、今後の在り方は新たなライティングサポート制度と合わせて考えていく。</p> <p>SAIについては、特に全学科目情報科学科目の現状の課題を抽出し、現状のままか、外部委託するかを検討する。</p> <p>TAIについて各学部では、①大学院生の減少で確保が難しい、②大学院生全員にあたらぬ、③月額報酬の場合、報酬に対して実働が少ない、人によって実働に差が生じる、④確保したいが他研究科生を重複採用できない、などの課題があり、①業務実働に合わせた報酬制度、②他研究科生の重複採用、③外部委託、などを検討することが考えられる。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>文学部では、2019年度現在、TAとLAIに関しては複数の専修で多数の活用実績を持っているが、SAIに関しては活用実績を持たない。TA、LA、SAの特性を見極めて適切な運用を図っていくことが求められる。</p>				
<指標1>	TAおよびLAの活用の検証と促進				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	TAおよびLA活用実態に関する検証	前年に引き続き、TAおよびLA活用実態に関する検証	これまでのTAおよびLA活用実態を踏まえて今後のTAおよびLA活用方法の検討	前年に引き続き、これまでのTAおよびLA活用実態を踏まえて今後のTAおよびLA活用方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により、TAとLAIについては通常と異なる活用を余儀なくされた。オンライン授業への補助など、新しい活用方法が浮上した。	昨年同様、新型ウィルスの感染症の影響で通常とは異なる活用を余儀なくされた。オンライン授業への補助でTAを活用した。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、これまでのTAおよびLA活用実態を踏まえて今後のTAおよびLA活用方法の検討	前年に引き続き、これまでのTAおよびLA活用実態を踏まえて今後のTAおよびLA活用方法の検討	これまでの検討を踏まえた適切なTAおよびLA活用方法の促進	これまでの検討を踏まえた適切なTAおよびLA活用方法の促進	
実績					
<指標2>	SAの活用の検討				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	SAの特性の見極め	前年に引き続き、SAの特性の見極め	SAの特性を見極めたうえでその活用方法の検討	前年に引き続き、SAの特性を見極めたうえでその活用方法の検討	
実績	新型コロナウイルス感染症の影響により、SAを活用する方法を新規に考える余裕はなかった。一方で、学部の運営に新たな問題がいろいろ生じており、そのうちどれがSAによって解決可能か検討を始めた。	対面授業が行われなかったため、SAを活用する十分な検討は行われなかった。新たな問題として、ポストコロナ時代に対応するSAの活用方法が浮上した。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	SAの適切な活用の促進	前年に引き続き、SAの適切な活用の促進	SAの活用実態の検証	前年に引き続き、SAの活用実態の検証	
実績					
<p>【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学部では、2021年度現在、各研究室付きのTAを21名、授業張付けの教育補助のTAを21名活用している。また、授業等のサポートのためのLAを延べ36名活用している。例年語学等学習のサポートのためのLAを延べ16名ほど活用しているが2021年度はオンライン授業となったため、採用していない。SAIに関しては、2021年度現在、活用の実態はないので、SA活用についてLA・TAの新たな活用も含め検討を進める。</p>					

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する学部独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度学部における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、短期大学・各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※2020 年度入学生より、「Kwansei コンピテンシー」を獲得することを念頭に置く旨を、各学部のディプロマ・ポリシー(DP)に追記済。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

(2) 選択型

実施計画(タイトル)	1-(11)-② 学部におけるハンズオン・ラーニングプログラムの推進			帳票の有無	要
内容	SGUダブルチャレンジ制度では、アウェイチャレンジ(①国際プログラム、②ハンズオン・ラーニングプログラム、③副専攻プログラム)の単位を修得して卒業する学生数(実数)を指標としており、SGU最終年度の2023年度においては5700名を目標数値としている。その5700名のうち約3000名が②ハンズオン・ラーニングプログラムの単位を修得することがもう一つの目標値である。目標である3000人を達成するためには、ハンズオン・ラーニングセンター開講科目の単位修得者数を増加させることはもちろんではあるが、学部におけるハンズオン・ラーニングを推進し、学部開講ハンズオン・ラーニングプログラム単位修得者数の増加を図らなければならない。				
学部独自の取り組み内容	文学部では、3学科からそれぞれハンズオン・ラーニング・プログラムを提供している。				
<指標1>	ハンズオン・ラーニング科目の検証				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の検証	前年に引き続き、各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の検証	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	前年に引き続き、各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	
実績	当初、3学科にそれぞれハンズオン・ラーニング科目を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、一部で不開講を余儀なくされた。実施できた科目については、安全対策など今後の参考になる成果をもたらした。	3学科で計8つのハンズオン・ラーニング科目を開講し、コロナ禍でありながら安全に十分注意して実施することができた。科目によっては、一部内容を変更するなどの対処が必要な場合もあったが、今後の実施計画のための貴重な成果を得た。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	各学科提供のハンズオン・ラーニング科目の見直し	
実績					
<指標2>	ハンズオン・ラーニング科目の学生への推奨				
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	
実績	新入生オリエンテーションが短縮して行われ、また予定科目が専修限定クラスであったため、例年行っているオリエンテーションでの周知を見合せた。特殊状況下での周知方法の課題が浮き彫りになった。	学生への周知は、入学時のオリエンテーションに大きく依存している。オリエンテーションが短縮して行われたため、特殊状況下での周知方法については、さらに検討の余地があることがわかった。			
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	前年に引き続き、ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検討	ハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法を確立	前年に確立したハンズオン・ラーニング科目の学生への周知方法について検証	
実績					
【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】					
文学部では、3学科がそれぞれにハンズオン・ラーニング科目を提供している。4専修が実施したが、それぞれ教育内容にふさわしい授業が展開されており、学生は準備段階から意欲的に取り組み、現地での実習を終えている。特にエクスカージョンでは現地の地方新聞からの取材を受け、掲載された。 現在11専修中4専修しか実施していないため、今後は実施していない専修にもハンズオン・ラーニングプログラムを実施できないか検討を継続していく。					

■国内ハンズオン科目					
科目名称	クラス数	定員等	2021履修者数	カリキュラム上の位置づけ	科目概要
美学芸術学基礎実習	1	定員なし・50名程度	55名	履修基準年度1年・美学芸術学専修用クラス	美術館やコンサート等での作品研究
地理学地域文化学実習A	2	定員なし・1クラス20名程度	23名、24名	履修基準年度2年・地理学地域文化学専修用クラス	「エクスカージョン」の事前・事後学習
地理学地域文化学実習B	2	定員なし・1クラス20名程度	24名、22名	履修基準年度2年・地理学地域文化学専修用クラス	「エクスカージョン」の事前・事後学習
エクスカージョンⅠ	1	定員約55名	47名	履修基準年度2年・地理学地域文化学専修用クラス	現地でのフィールドワーク
エクスカージョンⅡ	1	定員約55名	47名	履修基準年度3年・地理学地域文化学専修用クラス	現地でのフィールドワーク
臨床心理科学実習A	1	定員なし・1クラス5名程度	21名	履修基準年度3年・心理科学専修用クラス	外部の医療機関や施設等での実習
臨床心理科学実習C	4	定員なし・1クラス5名程度	4クラス計7名	履修基準年度4年・心理科学専修用クラス	外部の医療機関や施設等での実習
日本文学特殊講義5	1	定員なし・15名程度	6名	履修基準年度3年・学科科目(他学科生履修可)	神戸文学館での実習

3. 文学部のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
DPIに定める資質・能力の獲得状況	あなたはこの授業を通して卒業までに求められる資質・能力を向上できたと思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」)の回答割合(%)	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Kwansei コンピテンシー獲得状況	知識・能力・資質の程度 全項目 (「大変身についた」～「全く身につけていない」の5段階評価) (2018～2022年度) 当該年度卒業生と次年度1年生との調査による伸び (2023～2027年度) 当該年度卒業生とその1年生時との調査による伸び 「IR 新入生調査」「IR 卒業生調査」	5段階評価のうち、上位2つ(「大変身についた」「やや身についた」)の回答割合(%)の平均の差	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
汎用的能力の獲得状況	入学後の能力変化(表外※参照) (「大きく増えた」～「大きく減った」の5段階評価) 「IR 上級生調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「大きく増えた」、B「増えた」)の回答割合(%)	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業外学修時間	授業外時間に、授業課題や準備時間、復習をする時間(一週当たりの平均) 「IR1年生調査、IR 上級生調査」	一週あたり6時間以上の割合	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業目的・到達目標の達成度	あなたは、シラバスに示された授業の目的や、到達目標を達成できると思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2024年度	2026年度	2027年度
授業満足度	あなたは、全体としてこの授業に満足していますか。(「そう思う」～「そう思わない」の5段階評価) 「学修行動と授業に関する調査」	5段階評価のうち、A「そう思う」、B「どちらかというそう思う」の回答割合(%)	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
留学等派遣数	協定校への派遣学生数 「国際連携機構資料」	大学間協定に基づく派遣日本人学生数	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
TOEIC/TOEFL等の英語運用能力	SGUの取組みで確認している TOEFL 換算得点目標の達成人数 <参考(学部別目標値)> ■国際: TOEFL 換算 550点 ■文・総政: TOEFL 換算 540点 ■その他: TOEFL 換算 520点 「SGUに関する調査」	左記「TOEFL 換算得点」目標の達成人数(人)	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
学生生活満足度	大学生活を振り返って、学生生活は満足したものでしたか。(「満足」～「不満」の5段階評価) 「IR 卒業1年目調査」	5段階評価のうち、上位2つ(A「満足」、B「そこそこ満足」)の回答割合(%) *2018年度調査までは、A「とても満足」、B「満足」と回答した比率	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
就職率	就職率 「キャリアセンター統計資料」	就職者数(自営含まず)/就職希望者数	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
大学院進学率	大学院進学率 「キャリアセンター統計資料」	大学院進学者数/学部卒業生数	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(※)「知識・技能・能力の獲得状況」の「知識・技能・能力」とは、一般的な教養、論理的思考力、専門分野や学科の知識、グローバルな問題の理解、多様性を尊重する力、主体的に行動する力、リーダーシップ力、人間関係を構築する力、対立する価値を調整する力、地域社会が直面する問題を理解する能力、国民が直面する問題を理解する能力、困難を乗り越える粘り強さ、文章表現の能力、外国語の運用能力、生涯にわたって学び続ける能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、数理的な能力、コンピュータの操作能力、誠実さと品位、時間を効果的に利用する能力、卒業後に就職するための準備の程度、を指す

(2) 学部独自KPI

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
ライティング・センター活用率	ライティング・センター活用率	ライティング・センター活用者数 / 文学部学生数	非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
文学部内副専攻制の登録率	文学部内副専攻制の登録率	文学部内副専攻制登録者数 / 文学部学生数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
入試難易度 (偏差値)	ベネッセの進研模試のデータにおける合格可能性 60%以上となる偏差値 高大接続センター		非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
同系列学部勝敗	ベネッセの進研模試のデータにおける同系列学部合格者の競合大学(同志社、立命館、関西)との入学比率 総合企画部	本学と相手校の両方に合格していずれかに入学した受験生のうち、本学に入学した者の比率 本学入学者数 / (本学入学者数 + 併願校入学者) (%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
外国人留学者数	外国人留学生 CIEC 年次報告書	詳細は SGU の定義に準拠	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
ダブルチャレンジ派遣者数	当該年度の卒業生のうち、ダブルチャレンジ制度のアウェイチャレンジの単位を取得して卒業した学生数 グローバル化推進本部	①インターナショナルプログラム②ハンズオン・ラーニング・プログラム③副専攻プログラムのいずれかで単位取得し卒業した学生数 ※学部毎は延べ人数	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度 (「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率 (%)	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
スクールモットーの浸透度	スクールモットー“Mastery for Service”を普段意識する程度は (「常に行動の規範としている」～「全く意識しない」の5段階評価) IR 卒業生調査	5段階評価のうち、A「常に行動の規範としている」または B「ときどき意識している」と回答した割合 (%) * 2018 年度調査までは A「常に行動の規範としている」または B「頻繁に意識している」と回答した比率	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
Well-being 度	現在の自分を取り巻く環境(特定 7 項目)に対して、あなたはどのように思いますか。(「そう思う」～「そう思わない」の 4 段階評価) IR 卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値 (2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開
			2023年度	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度
			非公開	非公開	非公開	非公開	非公開

文学部実施計画・全体評価
<p>新型コロナウイルス感染症対応により、やむを得ずオンラインによる授業という教員・学生にとって初の試みであったが、授業満足度は大きく下がらなかつただけでなく、授業外学修時間が飛躍的に上昇したためか学生が自身の力や資質の向上を実感している結果となったことは興味深い。また、学生生活の満足度もそれほど下がっていない結果だが、これは恐らく学年別に調査すると違った結果がでたのではと推測している。</p> <p>上記各指標のデータ結果により、学生の能力向上と学生生活の満足度の両方を上げていくためには、対面授業の中にうまくオンラインを組み合わせることで、学生がキャンパス内外での様々な活動時間の増加を可能にしつつ、適度に授業外学修時間をもたざるえない状況を作り出すことが有効ではないかと考える。</p> <p>なお、今後も様々な実施計画は、教育・研究を推進させるための手段であり、目標設定やその評価自体が目的化する愚を避けつつ、文学部を取り巻く環境の変化に柔軟に対応できるよう努力を続けていきたい。</p>

【文学研究科】中期計画総括シート

提出日：2022年1月7日


責任者	文学研究科 委員長	担当部局	文学研究科
-----	--------------	------	-------

1. 文学研究科の理念、目的、各種方針

文学研究科の理念	変更の有無
文学研究科がその理念の中心に掲げるのは、人文科学の深い学識に裏付けられた人格の陶冶と、卓抜した水準における学術研究を通じた社会への貢献である。	有・
文学研究科の目的	変更の有無
<p>人文科学の深い学識に裏付けられた人間形成と、卓抜した水準における学術研究を通じた社会への貢献を目的とする。そのためには、人文科学の領域において、現代の高度な学問の進展に応じた研究を推進し、人格を陶冶するとともに、その研究の成果を学界、教育界、一般社会に還元することが必要である。具体的には、それぞれの学術領域に大きな貢献をなす専門的研究者を養成すること、高い専門性を活かして実社会の様々な場所で活躍することのできる高度専門職業人を養成すること、そして知識基盤社会を支える高度で知的な素養のある人間を育成すること、のそれぞれを重視する。</p> <p>以下に専攻ごとの目的を掲げるとともに、さらに三専攻に共通する目標を示す。</p> <p>文化歴史学専攻 文化歴史学専攻は、真・善・美の理想を求めて空間と時間の中を生きる人間の基礎的構造及び歴史について、高度な教育研究を行う。</p> <p>総合心理学専攻 総合心理学専攻は、現代社会に生きる人間の心理的諸相について、認知・行動・発達の観点から、その病理を含めて、高度な教育研究を行う。</p> <p>文学言語学専攻 文学言語学専攻は、言葉を持ち文化を形成する人間の営為について、文学と言語の両面から高度な教育研究を行う。</p> <p>共通の目標 前期課程では、研究者養成の第一段階として、後期課程との連携も視野に入れた研究教育を行うとともに、高い学識と豊かな創造性を携えて社会に貢献できる人間を育成する。後期課程では、高度な研究を継承かつ推進していく博士号を持つ優れた研究者を養成する。</p>	有・
学位授与方針(DP)	変更の有無
<p>文学研究科のディプロマ・ポリシー(DP)を以下のとおり定める。</p> <p>文学研究科は、人文科学の基礎領域及び応用実践領域での研究者・高度専門職業人と、知識基盤社会を支える高度で知的な素養を有する人材の養成を目的としている。その目的に照らし、博士課程前期課程においては、高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。博士課程後期課程においては、前期課程で得た知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>本研究科は、以下の専攻分野において、それぞれ次の方針に基づき学位を授与する。</p> <p>1. 文化歴史学専攻</p> <p>(1) 修士(哲学) 博士前期課程において、哲学倫理学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(美学) 博士前期課程において、美学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 修士(芸術学) 博士前期課程において、芸術学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 修士(歴史学) 博士前期課程において、日本史学・アジア史学・西洋史学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(5) 修士(地理学) 博士前期課程において、地理学地域文化学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(6) 博士(哲学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た哲学倫理学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(7) 博士(美学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た美学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(8) 博士(芸術学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た芸術学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(9) 博士(歴史学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本史学・アジア史学・西洋史学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(10) 博士(地理学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た地理学地域文化学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>2. 総合心理学専攻</p> <p>(1) 修士(心理学) 博士前期課程において、心理学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(学校教育学) 博士前期課程において、学校教育学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 博士(心理学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た心理学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた心理学の研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 博士(教育心理学)博士課程後期課程において、前期課程で得た学校教育学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた教育心理学の研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p>	有・

<p>3. 文学言語学専攻</p> <p>(1) 修士(文学) 博士前期課程において、日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(2) 修士(言語学) 博士前期課程において、日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学に関する高度な専門的知識を備え、柔軟な思考能力ならびに優れた技能を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(3) 博士(文学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p> <p>(4) 博士(言語学) 博士課程後期課程において、前期課程で得た日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学に関する知的素養を継承しつつ、現代の高度な学問の進展に応じた研究をさらに推進し、その成果を社会に発信していく能力を身につけた学生に対し、学位を授与する。</p>	
<p>教育課程の編成・実施方針(CP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>博士課程前期課程及び後期課程のカリキュラムを通じて、以下のような教育を行う。</p> <p>文学研究科では、人文科学の持つ総合性と多様性を取り込んで、学位授与に至るまで充実した研究活動が展開できるカリキュラム編成をとっている。博士課程前期課程では3専攻 12 領域の多彩な専門領域を設け、必修科目の研究演習に加えて資料研究・特殊講義・特殊実験・臨床実践・文献研究といった各専攻と各領域の特性を活かした選択科目を提供し、それらを体系的かつ横断的に学ぶことによって専門分野の研究能力を高めるとともに学知の広がりを目指している。博士課程後期課程ではさらなる主体的・創造的な研究能力の深化と発展に向けて、3専攻 11 領域体制のもと、各領域とも研究演習を経て博士論文作成演習に進むカリキュラムを設けている。</p> <p>各学位に関するそれぞれの年次毎のカリキュラムの理念は以下の通りである。</p> <p>1. 文化歴史学専攻</p> <p>(1) 修士(哲学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、哲学倫理学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や哲学的思考などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2) 修士(美学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、美学芸術学の諸領域の研究演習、特殊講義、資料研究などの科目を通じて、関連文献の読解や芸術作品の解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3) 修士(芸術学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、美学芸術学の諸領域の研究演習、特殊講義、資料研究などの科目を通じて、関連文献の読解や芸術作品の解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(4) 修士(歴史学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本史学・アジア史学・西洋史学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究、古文書学などの科目を通じて、資料・史料の読解などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(5) 修士(地理学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、地理学地域文化学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、資料・史料の読解や実地調査の実践などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2学年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(6) 博士(哲学) 博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(7) 博士(美学) 博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(8) 博士(芸術学) 博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(9) 博士(歴史学) 博士課程後期課程第1学年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2学年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3学年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p>	<p>有・無</p>

<p>(10)博士(地理学) 博士課程後期課程第1年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>2. 総合心理学専攻 (1)修士(心理学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、心理学の諸領域の研究演習、特殊講義、特殊研究、特殊実験、統計基礎理論、行動科学研究法、心理学実践などの科目を通じて、関連文献の読解や関連事項の実験などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2)修士(学校教育学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、学校教育学の諸領域の研究演習、特殊講義などの科目を通じて、関連文献の読解などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3)博士(心理学) 博士課程後期課程第1年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(4)博士(教育心理学) 博士課程後期課程第1年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>3. 文学言語学専攻 (1)修士(文学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本文学・英米文学・フランス文学・ドイツ文学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や文学テキストの解釈などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(2)修士(言語学) 博士課程前期課程の第1学年度では、大学院における学修・研究の基礎を定着させるとともに、日本語学・英語学・フランス語学・ドイツ語学の諸領域の研究演習、特殊講義、文献研究などの科目を通じて、関連文献の読解や言語事象の分析などの能力を鍛え、当該領域の専門的な研究能力を養成する。 博士課程前期課程の第2年度では、第1学年度に引き続き、当該領域の専門的な研究能力を高めるとともに、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い修士論文を完成させる。</p> <p>(3)博士(文学) 博士課程後期課程第1年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p> <p>(4)博士(言語学) 博士課程後期課程第1年度においては、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第2年度においては、第1学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高める。 博士課程後期課程第3年度においては、第2学年度に引き続き、研究演習や特別研究、さらには博士課程前期課程授業科目の中から選択科目を履修することを通じて、当該領域における専門的な研究能力をさらに高めるとともに、博士論文作成演習を通じて博士論文執筆に向けた準備を進め、それまでに身につけた専門知識や研究能力を十分に展開し、当該領域において、学生各自が個別に設定したテーマと目標に従い博士論文を完成させる。</p>	
<p>学生の受け入れ方針(AP)</p>	<p>変更の有無</p>
<p>博士課程前期課程 前期課程においては、豊かな人間性と幅広い教養をそなえた高度専門職を養成し、さらに研究者養成の第一段階として高度な専門的知識を教授するとともに創造的な研究のための柔軟な思考能力と優れた技能を育成します。そのために学部での学修の成果が一定の水準以上に達していることを入学試験が課す問題で証明することができ、そこから転じてさらなる研究に向かう強い意欲と計画性を提示することができる者を求めます。</p> <p>博士課程後期課程 後期課程においては、高度な研究の継承とそれを創造的に推進する博士学位をもつ優れた研究者を養成します。人文科学の領域において、現代の高度な学問の進展に応じた研究を推進し、その研究の成果を学界、教育界、一般社会に還元することを重視しています。こうした方針に基づいて修士論文を中心とする前期課程における学修の成果の裡に、自らの選んだ専門領域に関して幅広く研鑽を積んだ証と従来の研究に対峙しうる独創的な発想の萌芽的形態が見られる者、加えて後期課程入学後学位申請論文提出までのけっして短くはない期間を自立した粘り強い姿勢で研究対象と取り組んでいかれる者を求めます。</p>	<p>有・</p>

教員組織の編制方針	変更の有無
人事委員会の機能を重視する。また現状を再検討し、課題があればそれを解決することに努め、年齢構成と男女比のバランスがとれた自由闊達で活気ある教員組織をめざす。	有・ 

2. 実施計画

(1) 必須型

実施計画(タイトル)	1-(1)-② 三つのポリシーに基づく教学マネジメントの推進(3ポリシーの見直し・検証、カリキュラム見直し・拡充、カリキュラムマップの整備)			帳票の有無	不要
内容	<p>本学は、大学として「学部の区別なく学生が共通に身に付けるべき知識・能力・資質」(「Kwansei コンピテンシー」)を時代に即して新たに定め、各学部・研究科はそれを土台に「各分野における学位授与に必要な知識・技能」であるDP(ディプロマポリシー)を策定する。このDPは、すべての学生が卒業/修了必要単位数を取得した段階で修得しているべき学修成果を表したものである。この基本原理を守るべく、学部・研究科は(a)DPの再確認(b)DPとCP(カリキュラムポリシー)の整合(c)シラバスの実質化(d)シラバスに沿った成績評価(e)DPとAP(アドミッションポリシー)の連動、を厳格に運用する。</p> <p>本学はこうした学部/研究科による三つのポリシーに基づく教学マネジメントを統括し、大学全体の内部質保証を推進することで、卒業する全ての学生の質を保証する。</p>				
学部独自の取り組み内容	<p>3専攻12領域によって構成され、各専攻・各領域が専門性の高い研究・教育を行っている文学研究科においては、①文学研究科のDP・CPと各専攻・領域における教育内容との間の整合性の検証、②文学研究科のDP・CPとKwansei コンピテンシーとの適合性の検証、③文学研究科の各授業とDP・CPとの関係をシラバスに明示する方法の整備 を同時に実施していく必要がある。この3点について、客観的なデータや具体的な方策を検討しつつ実施を進める。</p>				
<指標 1>	文学研究科のDP・CPと Kwansei コンピテンシーとの間の整合性に関する検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学研究科のDP・CPの記述内容の妥当性に関する再検討	文学研究科のDP・CPの記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科のDP・CPの記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科のDP・CPの記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性に関する検証	
実績	2020 年 10 月の研究科委員会でDP・CPの記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。	2021 年 10 月の研究科委員会でDP・CPの記述内容と Kwansei コンピテンシーとの整合性について再検討を実施し、議論の結果、問題がないことを確認した。			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	Kwansei コンピテンシーとより整合性の高いDP・CPへの改訂に向けた検討	前年度に引き続き、Kwansei コンピテンシーとより整合性の高いDP・CPへの改訂に向けた検討	Kwansei コンピテンシーとより整合性の高い文学研究科DP・CPの策定とその周知	前年度に策定した新たな文学研究科DP・CPの妥当性の検証	
実績					
<指標 2>	文学研究科のDP・CPと各専攻・領域における教育内容との間の整合性の検証				
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標	文学研究科のDP・CPの記述内容の妥当性に関する再検討	文学研究科のDP・CPの記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科のDP・CPの記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	前年度に引き続き、文学研究科のDP・CPの記述内容と各領域・専攻の教育内容・カリキュラムとの間の整合性に関する検証	
実績	2020 年 10 月の研究科委員会でDP・CPの記述内容について再検討を実施し、議論の結果、美学芸術学領域のDPを一部修正することを決定した。	2021 年 10 月の研究科委員会で整合性の問題がないこと、一方で推薦入学試験制度の変更にともない、次年度以降に再検討が必要であることを確認した。			
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標	各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高いDP・CPへの改訂に向けた検討	前年度に引き続き、各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高いDP・CPへの改訂に向けた検討	各専攻・領域の教育内容・カリキュラムとより整合性の高いDP・CPの策定とその周知	前年度に策定した新たな文学研究科DP・CPの妥当性の検証	
実績					

<指標 3>	文学研究科の各授業とDP・CPとの間の対応関係をシラバスに明示する方法の整備			
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標	文学研究科の各授業とCPとの対応関係の検証	前年度に引き続き、文学研究科の各授業とCPとの対応関係の検証	CPIにより合致した各授業の再配置に向けた検討	前年度に引き続き、CPIにより合致した各授業の再配置に向けた検討
実績	2020 年 10 月の研究科委員会でDP・CPの記述内容の再検討を実施した際、現在開講されている授業とCPとが十分に整合していることについても確認した。	2021 年度 10 月の研究科委員会でDP・CPの記述内容が検証され、中期計画総括シート作成にあたって現段階では整合性がとれていることが確認された。		
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度
目標	再配置された各授業と、文学研究科DP・CPとの対応関係をシラバスに明示する方法についての検討	前年度に引き続き、再配置された各授業と、文学研究科DP・CPとの対応関係をシラバスに明示する方法についての検討	文学研究科DP・CPとの対応関係を明示したシラバスの運用の開始	文学研究科DP・CPとの対応関係を明示したシラバスの妥当性の検証
実績				
大学基準協会による指摘事項(認証評価)	指摘事項	文学研究科文化歴史学専攻博士 課程 前期課程・後期課程において、「修士(美学)」「修士(芸術学)」「博士(美学)」「博士(芸術学)」は異なる学位にもかかわらず同一の学位授与方針を定めているため、是正されたい。		
	改善計画	(何を、どのように改善するか) すでに美学芸術学領域の教員が検討、変更案を作成し、領域代表者会議で確認、研究科委員会で承認済(2020 年 10 月 28 日)。ホームページで公開済みである。		
	指摘事項	文学研究科博士課程前期課程では、研究指導計画として スケジュールを定めていない。		
	改善計画	(何を、どのように改善するか) すでに文学研究科執行部が研究指導の方法およびスケジュールを作成し、領域代表者会議で確認、研究科委員会で承認済(2020 年 10 月 28 日)。ホームページで公開済みである。また、2023年度履修心得に掲載する予定である。		
<指標 4>	評価の指摘事項に対する対応			
ロードマップ	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度
目標		実施		
実績		対応済み		
<p>【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】</p> <p>文学研究科では、今年度の主要な取り組みとして博士課程前期課程の推薦入学試験制度の改革を進めた。具体的には大学院進学者を安定的に確保するという課題の解決の一策として、博士課程前期課程の第一次学内推薦入試の筆記試験(外国語)をなくして書類審査と面接試験のみとし、面接試験と合否発表を9月から7月に前倒しするというものである。研究科執行部会会議および領域代表者会議での議論、研究科委員会での数回にわたる懇談の末、10 月の研究科委員会で変更が承認された。引き続き、来年度5月の募集に向けて、文学研究科のDP・CPと Kwansai コンピテンシーとの整合性の問題についても念頭に置きつつ、募集要項など細部を検討していくことになっている。特に推薦入学者の外国語学力の認定方法は各領域で設定する必要があるため、この過程で、昨年度の課題となっていた各領域が提供する授業とCPとの整合性やCPへの具体性の付与の問題について再検討を行いたい。</p>				

実施計画(タイトル)	8-(2)-① KGI・KPIの設定・活用			帳票の有無	不要
内容	非営利組織である学校のマネジメントにおける最大の課題の一つは、最上位のアウトカム(成果)を定め、その達成度を測るKGIやKPIを設定することにある。学院ではKPIダッシュボード等のツールを活用して「Kwansei Grand Challenge 2039」(超長期ビジョン・長期戦略)および中期総合経営計画(実施計画・基盤計画)の進捗や達成度を含めた成果を検証する仕組みを構築する。そのために、教学・経営両面のデータ活用を司るのに最適な組織体制を確立する。また、各学校および大学の各学部も、全学のKPIと連動しながら個別の状況に合わせて独自にKPIを設定し、毎年その数値や取組状況を評価し、改善・促進の取り組みに活用する。				
学部独自の取り組み内容					
<指標1>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※本帳票の末尾において、学修成果を測定する研究科独自のKGI・KPIを策定しており、これらの指標を用いて毎年度研究科における実施計画・全体の取組みの評価を行っている。				
目標					
実績					
<指標2>					
年度毎の目標	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	
目標					
実績					
【2021年度の進捗状況・今後の取り組み】					

実施計画(タイトル)	8-(10)-① 内部質保証体制の確立と運用			帳票の有無	要
内容	<p>本学には、従来から二つの大きなPDCAサイクルが存在していた。一つは中期計画(SGU 含む)であり、もう一つは大学の自己点検・評価および各学校の学校評価である。</p> <p>両者はそれぞれの目的体系を持ちながら重複する部分が多く、業務負担の軽減の観点からも、共通の目的・目標の下で学院・大学全体を見渡した統合的なPDCAサイクルの確立が必須となっている。</p> <p>このため、本学では、2019 年度から各学部／研究科、各学校が本格的に取組を開始する「中期総合経営計画」において、その取組の成果を定期的に測定、評価、改善することを通じて、効率的・効果的なマネジメントの実現を図る。</p>				
学部独自の取り組み内容					
<指標 1>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	※研究科における毎年度の本帳票の作成および学内各種会議体での点検・評価、改善活動などにより、内部質保証システムの PDCA サイクルを確立する。				
目標					
実績					
<指標 2>					
年度毎の目標	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	
目標					
実績					
年度毎の目標	2024 年度	2025 年度	2026 年度	2027 年度	
目標					
実績					
【2021 年度の進捗状況・今後の取り組み】					

3. 文学研究科のKPI

(1) 学修成果に関するKPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度			
学位授与数(M・D・P)	修士、博士、修士(専門職)の学位授与数(※乙号除く) 「大学基礎データ」	授与する学位数が多いほど○(人)	M	非公開	M	非公開	M	非公開		
			D	非公開	D	非公開	D	非公開		
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			M	非公開	M	非公開	M	非公開	M	非公開
			D	非公開	D	非公開	D	非公開	D	非公開
就職・進路決定率(M)	就職・進路決定率 「キャリアセンター統計資料」	(就職+自営+就労継続)/(修了者+進学者)	現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開		
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
博士後期課程への進学者数(M)	進学者数 「キャリアセンター統計資料」		現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開		
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
日本学術振興会特別研究員数(新規)(D)	特別研究員のうち、当該年度の新規採用者 「研究推進社会連携機構資料」		現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開		
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
研究者輩出数(D)(将来)			現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開		
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	
			2023年度		2024年度		2025年度		2026年度	

(2) 研究科独自KPI

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
文学研究科学生研究支援金の申請者数	院生に対する研究支援金制度(学会発表の旅費補助・研究発表ポスター作成費補助・論文の外国語校閲料補助など)への申請人数	申請者数が多いほど○(人数)	現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開
			2023年度		2024年度		2025年度	
			2023年度		2024年度		2025年度	
学会での院生による発表件数	国内・国外で開催された学術学会での大学院生による発表件数(口頭発表・ポスター発表の合計)	発表件数が多いほど○(件数)	現在値(2018年度)	非公開	2019年度	非公開	2020年度	非公開
			2023年度		2024年度		2025年度	
			2023年度		2024年度		2025年度	
			2023年度		2024年度		2025年度	

(3) 学院全体のKPIに関する指標

KPI	定義	基準	現在値(2018年度)	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	
卒業後の進路の満足度	卒業後の進路の満足度(「満足」～「不満」の5段階評価) 卒業時調査	5段階評価のうち「満足」と回答した比率(%)	現在値(2018年度)	/	/	/	非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度	
			2023年度		2024年度		2025年度	
Well-being度	現在の自分を取り巻く環境(特定7項目)に対して、あなたはどのように感じますか。 (「そう思う」～「そう思わない」の4段階評価) IR卒業生調査	「E 時折、収入面が不安になることがある」を除く7項目に対して A「そう思う」、 B「どちらかといえばそう思う」と回答した割合の平均値	現在値(2018年度)	/	/	/	非公開	
			2023年度		2024年度		2025年度	
			2023年度		2024年度		2025年度	

文学研究科実施計画・全体評価

昨年度に検討と修正を行った DP・CP およびシラバスについて、2021年度は継続してその計画を実施している。修正を行ったことによる変化については今年度末、さらに次年度にかけて検討する必要がある。また、研究科の DP と Kwansei コンピテンシーに沿う形で院生が育っているのか具体的な評価を行うという昨年度以来の課題については、今年度も検討を重ねる予定である。シラバスについては、DP・CP、授業の実施方法、授業の事前・事後学習の内容などを明確に学生に伝えるシラバスのフォーマットが学部、大学院共に備えられた。その結果、大学院でもすべての授業で DP・CP と授業科目との関連が明記され、多くの授業で授業後ごとの授業計画や授業外学習の内容が分かるようになった。ただし、本年度も新型コロナウイルス感染症対策のために対面授業からオンライン授業へと変更を余儀なくされた講義や演習があった。オンライン授業の継続、また授業形態の途中変更は大学院の教育に少なからず影響を与えており、今後その評価と対策が必要となると考えられる。

文学研究科の KPI の中で、学位授与数は 2018 年度、2019 年度に続いて 2020 年度も堅調であった。就職・進路決定率については、2018 年度から 2019 年度は若干減少したが、2020 年度は 100%に近い値となった。これは、本学では独自の大学院生へのキャリア支援として、キャリアガイダンス、個人面談、求人情報の提供、企業セミナー、インターンシップ体験を実施しており、その成果が表れてきたものと考えられる。また、後期課程への進学者は 2018 年度から 2019 年度は減少したが、そこから 2020 年度は増加に転じた。後期課程の院生が申請する日本学術振興会特別研究員(新規)の採用人数は、2018 年から見て 2020 年度は 2 倍以上に増加した。以上から考えると、文学研究科は安定して学位授与が行われ、就職や進路(後期課程への進学を含む)も高い率で決定しており、中期計画の目標は順調に達成されつつあると評価できる。また、研究科独自の KPI である学生研究支援金(学術大会での発表への支援金)の申請者数は、2019 年度から 2020 年度には約 1/5 程度に減少した。これは、コロナ禍でオンラインの学会が増え、ポスター作製や旅費が不要になったからだと考えられる。ただし、大学院生の発表数自体が減少している可能性もあり、来年度も継続する可能性があるコロナ禍でのオンライン学会での発表支援の在り方について、検討を加えていく必要がある。